

国文学（近世）

山本 卓

関西大学国文学科（後に国語国文学科を経て国語国文学専修となる）は、旧制専門部国語漢文科を起源として、昭和二十三年に新制大学として発足した。同時に、関西大学国文学会は、旧制時代にあった国語漢文学会を継承して組織された。その研究発表機関である『国文学』誌は、昭和二十五年五月に第一号を発刊している。以下、近世文学についてその歩みを人物中心に概観するが、敬称は原則として氏に統一した。失礼の段はここに「ご寛恕を乞う次第である。

さて、第一号には当時本学教授であった金子又兵衛氏の「西鶴の説話とアーチ形プロット」が掲載されている。『国文学』誌における近世文学研究の歩みの第一歩である。第二号は本学員外教授をつとめられた「頼原退蔵博士追悼近世文学特集」として金子又兵衛氏「『男色大鑑』の研究」・小島吉雄氏「芭蕉に於ける新古今的なものについて」・暉峻康隆氏「近世小説様式論」・西山隆二氏「蕉門の成立」・野間光辰氏「頼原博士 遺愛 元禄歌舞伎狂言本七種について」・山崎喜好氏「『旅寝論』の調査——『篇突論』」許

去論評解」を中心として——・田中義眞氏「西吟の研究——宗因・西鶴との関係を中心として——」を集めた。錚々たる面々が執筆者である。頼原退蔵氏の遺徳が偲ばれる。第三号には中村俊定氏「蓼太研究——俳書から見た蓼太の足跡——」・谷沢永一氏「『雨月物語』読後」を掲載する。谷沢永一氏は、後に近代文学の研究者として名をなし、本学教授となった。本誌掲載當時は実に本学学部三年次生である。その才能は驚嘆に値する。第四号には堀正人氏「杜甫と芭蕉」・吉永孝雄氏「近松の『傾城反魂香』のテキスト試案」・横山正氏「浄瑠璃評判記解説」の連載が始まる。第六号には盛田嘉徳氏「夷がきの芸態」・飯田正一氏「来山の集について」・前田金五郎氏「西鶴用語小考」・中野真作氏「『好色二代女』の老女のかくれ家」の挿絵に就いて——・横山正氏続稿が掲載された。その執筆者をみると飯田正一氏は本学教授であるが、盛田嘉徳氏・横山正氏は大阪学芸大学助教授、前田金五郎氏は後に西鶴研究者として著名となるが当時は大阪府立高等学校の教諭であった。また中野真作氏は本学専門部から新制大学に編入し、当時本学の大学院生であった（後に羽衣学園短期大学教授となる）。草創期の『国文学』誌の実態はこのようなものであった（このころは季刊をめざしていた）。本学の教授・大学院生など関係者ばかりでなく、まだまだ発表の場の

限られていた時代に『国文学』誌はこのように開放的であった。近世文学研究者にとつて数少ない発表の機会を提供する貴重な発表機関であつたといえようか。

第七号には廣田二郎氏・西山隆二氏・横山正氏、第八号には彌吉菅一氏・鈴木重雅氏、第九号には後藤丹治氏・村田穆氏、第十号には笠井清氏・尾形仂氏、第十一号には飯田正一氏・金子又兵衛氏、第十二号には前田金五郎氏、第十三号には阿部喜三郎氏、第十四号には岩田九郎氏、第十六号には飯田正一氏、第十九号には宇佐美喜三八氏・飯田正一氏・金子又兵衛氏、第二十号には飯田正一氏、第二十一号には飯田正一氏の他に小谷省三氏が掲載された。ここまで本学教授か他大学の教授などが中心であつた執筆者に本学大学院生の小谷氏加わることとなつた。論題は「西鶴武家物の素材」である。この号から金子又兵衛氏と西岡宸氏の共著で「『狂雲集』註解」の連載が始まる。西岡宸氏は本学学部・大学院修了後、当時本学第一高等学校教諭である。第二十二号には阿部喜三郎氏・神堀貞子氏（後に本学教授となる神堀忍氏のご令室）・飯田正一氏、第二十三号には金子又兵衛氏・中野真作氏・飯田正一氏・中村幸彦氏・丸山和彦氏が執筆している。後に本学教授となる中村幸彦氏であるがこの当時は九州大学教授である。第二十四号には神堀貞子氏・

吉江久彌氏・飯田正一氏、第二十六号には飯田正一氏、第二十七号には宇佐美喜三八氏、第二十八号には飯田正一氏、前田金五郎氏、第二十九号には野田寿雄氏・宇佐美喜三八氏・飯田正一氏が掲載されている。この号は本学教授であつた「風巻景次郎博士追悼号」として編まれ、野田寿雄氏が「追憶」・飯田正一氏が「晩年の風景教授」の一文を寄せている。第三十号には坂元氏、第三十一号には飯田正一氏、第三十五号には松平進氏、第三十六号には飯田正一氏が書評を執筆している。第三十七号には中野真作氏の論考が掲載されるとともに、本学助教授であつた「平野健次監修解説レコード『上方の端唄』の書評を吉川英史氏が、「飯田正一校注『本朝水滸伝後篇』の書評を前田利治氏が執筆している。第三十二号には論文として神堀貞子氏・吉永登氏（論題が「契沖伝の新資料」であるので本稿に含めた）、また「片山豊次郎
平野健次編集『京舞井上流歌集』書評」を吉永孝雄氏が執筆している。第四十一号は北村学氏、書誌学研究者として著名な天野敬太郎氏が「井原西鶴書誌案内」・「井原西鶴作品の外国語訳について」を寄せている。第四十二号には本学史学科教授であつた「大庭脩著『江戸時代における唐船持渡書の研究』書評」を水田紀久氏が執筆している。水田紀久氏は後に本学教授となるが、この当時は大阪府立高等学校教諭であつた。この書評掲

載の顛末は本誌28頁水田紀久氏稿に詳しい。また本学専門部卒業生の「北村学著『竹外二十八字詩評釈』書評」を長谷川雅樹氏（本学専門部卒業生）が執筆している。第四十三号には松平進氏、第四十七号には中村幸彦氏「景樹と子規」を掲載する。中村幸彦氏は九州大学教授を定年前に辞し、関西大学教授に就任された。関西大学国文学会におけるその記念講演を整理されたのが本論文である。まさに碩学・泰斗として一世になる中村幸彦先生をお迎えしたことはよるこばしいかぎり、本学の近世文学研究は多大なるご垂教を蒙り進展することとなった。

第四十八号には大坂芳一氏（本学学部卒業生）、第四十九号には大坂芳一氏の論考と書評として「大谷篤藏編『近世大阪藝文叢談』賛」を後に東京大学教授となる延広真治氏（当時名古屋大学講師）が執筆している。第五十号には中村幸彦氏・水田紀久氏（本学教授）、第五十一号には関屋俊彦氏（後本学教授、当時大学院生）の論文と延広真治氏の「本田康雄著『式亭三馬の文芸』書評」および「中村幸彦著『近世文芸思潮攷』紹介」が掲載された。第五十三号には水田紀久氏、第五十四号には水田紀久氏・大西義紀氏（本学大学院修了生）、第五十五号には水田紀久氏・林省之介氏、第五十八号には大内由紀夫氏（後本学第一中学校高等学校教諭、当時本学大学院生）の資料紹介、第六

十一号には山本卓（本稿執筆者、当時本学大学院生）、第六十二号には山本卓、第六十三号には肥田皓三氏（本学教授）・山本卓、第六十五号には山本卓、第六十八号には乾裕幸氏（本学教授）・神楽岡幼子氏（後愛媛大学教授、当時本学大学院生）・山本卓、第六十九号には竹内千代子氏（後英知大学教授、当時本学大学院生）、第七十号には神楽岡幼子氏、第七十一号には竹内千代子氏、第七十二号には乾裕幸氏、第七十三号には竹内千代子氏・乾裕幸氏共著による注釈と山本卓による新資料報告の他、楠元六男氏による〈書評〉竹内千代子編『炭俵』連句古註集」が掲載された。第七十四号には乾裕幸氏、第七十七号には「山本卓解題『浮世草子集』書評」が高橋圭一氏により執筆されている。第七十八号には乾裕幸氏・山本卓・中村隆嗣氏（本学大学院修了、大阪成蹊短期大学教授）・神楽岡幼子氏・長谷あゆす氏（後大阪樟蔭女子大学講師、当時本学大学院生）の論文と〈書評〉として「山本卓解題『西川祐信集』上・下巻」を松平進氏、神楽岡幼子解題『青本黒本集』を木村八重子氏が執筆している。第七十九号には乾裕幸氏、第八十号には乾裕幸氏（翻刻）、第八十一号は在職中に急逝された「乾裕幸教授追悼号」として乾裕幸氏・神楽岡幼子氏の論文と、「書評集」として、乾裕幸氏の著書に対する諸氏それぞれに既発表の書評を転載して集成する。

第八十三・八十四合併号には藤田真一氏（本学教授）、第八十五号には（書評）として「乾裕幸著『俳句の本質』を加藤定彦氏が、『神楽岡幼子氏著『歌舞伎文化の享受と展開』を読む』を萩田清氏が執筆する。第八十九号には藤田真一氏、第九十一号には藤田真一氏・竹内千代子氏・山本卓、第九十二号には中尾和昇氏（後奈良大学講師、当時は本学大学院生）、第九十三号には藤田真一氏・中尾和昇氏、第九十四号には藤田真一氏・中尾和昇氏、第九十六号には藤田真一氏・神楽岡幼子氏、第九十七号には山本卓・中尾和昇氏、第九十八号には藤田真一氏、第九十九号には藤田真一氏・黒澤暁氏（本学大学院生）・山本卓（翻刻）、第一〇〇号には藤田真一氏・中尾和昇氏・中村真理氏（本学大学院生）・胡文海氏（本学大学院生）・山本卓（翻刻）と水田紀久氏・肥田皓三氏・中野眞作氏の一〇〇号に寄せての小文・小論が掲載された。

以上が関西大学国文学会『国文学』一〇〇号の歩み（近世文学篇）の粗描である（執筆者については網羅したつもりである）。このように概観すると、『国文学』（近世文学）はその時々々の専任教員を中心に前期は学外からも多数の寄稿を集め、後期は本学専任教員・大学院生（および修了者）を主たる執筆者としていたことになる。いずれにしても、近世文学研究者ならびにそ

れを志す者にとつて、『国文学』誌は重要な権威ある研究発表機関でありつづけ、斯界の研究の進捗に多大なる貢献をなしてきたものと思われる。先人のご尽力の賜物である。今こうして一〇〇号の歩みをふりかえる時、その伝統の継承と今後のさらなる発展を期したいと肝に銘ずる次第である。

（やまもと たかし／本学教授）